

「職業・技術者倫理」の課題 Themes of 'Vocational Ethics for Engineer'

待鳥 はる代 (職業能力開発総合大学校)
Haruyo Machitori

This is a report of a consideration on the main themes of 'vocational ethics for engineer.' They are: technology, relationships between technology and the concerned persons, and the social process in which technology is involved. They are to be studied on three theoretical bases: technological, ethical and sociological theories. About the ethical basis, virtue ethics, utilitarianism, deontology of Kant, and 'cooperation' of Hegel are considered in this paper.

keywords : ethics, vocational ethics, engineering ethics, education

1. はじめに

職業能力開発総合大学校(以後、「職業大」と記す)では平成24年度に開設された総合課程の初年度教育のカリキュラムに「職業・技術者倫理」という科目を設置している。

総合課程は「プロセスイノベーター」の養成を目的とし、開発・設計だけでなく製品の製造工程全体をマネジメントできる技術者であると同時に、人材育成においても指導的役割を果たすことができる職業人を育てることを目的としている。従って、技術と技能に通じ、職業能力の形成も指導できる能力を身につけてもらうようカリキュラムが設計されている。その中で、技術者倫理だけでなく広く職業の倫理を学ぶ必要があるという考え方からこの科目が設置された。

技術者倫理または技術倫理ないし工学倫理はアメリカで始まった'engineering ethics'の訳語であり、アメリカでは大学工学部におけるエンジニア教育の重要な一環として行われてきている。C. ウィットベックの技術倫理の教科書¹⁾には、その前書きに「本書が主題とするのは、エンジニアと応用科学者が担うプロフェッショナルとしての責任である。」と述べられている。そこに登場するのは研究、開発、設計に携わる研究者やエンジニアである。

これに対し、職業大では技能の問題をも考える必要があり、また職業訓練という事業の中での技術・技能の倫理、あるいは職業訓練における倫理ということをも視野に入れておく必要がある。

本稿は本科目が果たすべき役割と、そのための指針を探る試論である。

2. 職業倫理の基本的な考え方

職業倫理とは一言で言ってしまえば、職業への専心以外のものではない。職業は社会的分業の一分枝、つまり社会の維持と再生産に必要な労働の一部を担うものであるから、本来公益のためにある。従って私心なくその業に専心することが、即ち職業の倫理となる。

社会学者リチャード・セネットは、現代の労働者に必要な「精神的・感情的錨」ないし「文化的錨」として「ナラティブ」「有用性」「職人技」の三つを挙げ、その中でも最も根本的なものは「職人技(craftsmanship)」であると主張している。セネットは「職人技」を次のように説明している。

「それ自体を目的として何事かをおこなう、というのが広く理解された職人技の意味である。²⁾」

「それ(職人技)はコミットメント〔専念、関与一翻訳者〕である。」「何も手に入らずとも、何事かを正しくおこなうことが真の職人精神なのである。私欲を超えたこうしたコミットメントほど一私はそう信じるのだが一人を感情的に高揚させるものはない。それがなければ、人間は生存するための闘争だけに終始することになるだろう。」³⁾

また「仕事への誇りは熟練と専念に対する報酬として職人技の核心に存在する。」⁴⁾とも述べている。

果たすべき仕事を、それ自体を目的として、正しく行うこと、このことが職業倫理の核心であり、職業倫理に係わる様々な問題を考えるための出発点であり、よりどころである。技術倫理においてもこのことは同じである。

3. 職業倫理の問題領域

以上のことから、では「果たすべき仕事」とは何か、「正しく」とはどういうことか、が問うべき問題となってくる。この問いをどのように展開すべきかを考えるために、まずは技術者倫理に限らず職業倫理一般の問題領域について整理してみたい。

職業倫理を研究対象とした場合、明らかにしていくべき課題には次のようなものが含まれる。

第一に、職業倫理は働く人々の中に保持されているものである。また、職場に保持されているものである。従って、職業倫理学はまずその職業に就いて働く人の倫理や職場の倫理を表現するということから始めなければならない。

専門職の職業倫理を表現したものとして、様々な職業団体による倫理綱領があり、医療倫理、法曹倫理、教育倫理、工学倫理、技術倫理、ビジネス・エシックス等のテーマについて多くの提言や研究成果がある。これらに学ぶことが必要である。また、働く人々の個人史、職場史、労働史等について、多数存在するフィールドワークやルポルタージュ等に学ぶことも重要と思われる。独自の聞き取り調査やフィールドワークも必要かもしれないが、まずは様々な表現されたものを手がかりに、働く人々の職業倫理、ないしセネットの言葉を借りて言えば、精神的・感情的・文化的錨をとらえていくことができるであろう。

第二に、職業とは何か、職業というものをどのようにとらえるか、という本質的な議論が必要である。職業とは何かという概念、すなわち職業に対する基本的な考え方や姿勢は職業倫理の基礎だからである。このことはそれぞれ特定の職業について、その職業は何を業としているのかを追求していくことによって明らかになるものである。

様々な専門職の倫理を表現したものを調査すると、各々の業務に対応して多様な内容を含んでいるが、職種にかかわらず必ず共通して含まれているものがある。その一つは、その職業の理念、責務、使命を明確にしようとしていることである。

職業は社会的分業の体系である。特定の職業はその業務をもって社会を支えている。職業の理念と責務を明確に認識することは、個人の職業倫理を支えるものともなり、具体的業務内容や仕事のあり方を考える基礎となるものでもある。

第三に、職業生活の中で出会うであろう諸困難、諸問題に対してどのように対応していくか、どう考え、

判断すべきかを検討していかなければならない。

先に述べた様々な専門職の倫理を表現したのを見ると、いずれの職業も、その職業において出会うであろう困難や諸問題を特定し、それらに対応するためのガイドラインを示そうとしている。

その困難や諸問題は、その特定の業務が人々に関わる所に生じる。つまり、同業者同士の関係も含まれるが、職種の違い同僚との関係、職場組織の中での上司や部下との関係、情報伝達や意思決定に関わる問題、顧客との関係、公衆との関係などにおいて生じる諸問題である。ここには価値、判断、責任、善、正不正といった本来の規範倫理的なテーマが現れる。

特定の業務そのものがそれに取り組む人にもたらす困難～例えば、技術的限界にぶつかったなど～は、関係者の間での対応や判断の問題として、倫理的考察の対象となる。

第四に、職業はその活動を規定する様々な法や制度に深く関連している。従って、それら広い意味での社会的制度を理解し、職業が社会の中でどのように実現されていくのかを知ることにし、職業を正しく行うことはできない。

また、働く者の立場から見れば、能力形成や職業能力市場、雇用関係に関する諸制度、市民としての義務や権利など、職業に関する社会学、経済学、法学的知識を欠くことはできず、社会の中での職業労働のあり方に関する認識を持って、その中でどのように働き生きていくかを考える力を養うことが必要である。

第五に、職業倫理の研究には特定の職業における具体的な事例や場面の研究が欠かせない。それぞれの職業に関わる倫理的問題は、その職業そのものの性質によって引き起こされるからである。現場に生じる問題を丁寧に研究する中で、倫理学が果たすべき役割も明らかになると考える。

4. 技術者倫理の問題領域

前節で述べたことを簡単に整理してみると、

(1) 職業の倫理はその職業に就いている人々によって生み出される。

(2) その職業は何を業とするのかを明らかにしなければならない。職業倫理はそこから始まる。

(3) 職業が人々と係わるところに倫理的問題が生まれる。

(4) 職業は社会的視野において理解しなければならない。

(5)職業倫理の研究には現場の問題の研究が欠かせない。

ということが言える。

これらを技術者の職業倫理に当てはめてみよう。

第一に、技術者の職業倫理は技術者によって生み出される、ということである。このことは第二の、技術とは何かを明らかにすることによって技術の倫理を明らかにする、ということと結びついている。技術とはどのような営みであるのか、技術を正しく行うとはどういうことかを知ることが技術倫理の中心になければならない。また、技術そのものの論理と実践をよく知る者が、その倫理的問題も知るはずである。技術に関わる倫理的問題は、技術そのものの性質から照らしてみる必要がある。

比屋根均著「技術の営みの教養基礎 技術の知と倫理」⁵⁾はこの課題への取り組みに一つのモデルを与えてくれる。比屋根は技術の知の不確かさを見据えながら、丁寧な事例考察によって、技術と倫理の結びつきを明らかにしている。技術者倫理の技術論的基礎の重要性を教えられる。

第三は、技術者が人々と係わる場所に生じる問題である。技術の仕事は一人ではできない。例えば新しい製品が生み出される場合を考えてみれば、多様な知識・技能を持ち、立場の異なる大勢の人々の協力なくしては実現できないことがわかる。技術者または技術者でない同僚、上司や部下、顧客、経営者、公衆など多くの人々との関わりの中で、技術の営みが適正に行われるために技術者が果たすべき役割と責任、正しい判断などが研究されなければならない。

第四は、技術の営みを社会的視野において理解することである。これを技術の観点から見れば、技術が社会を変え、あるいは社会に影響を与えるプロセスを全体として見ることで、社会の観点から見れば、社会が技術をどのように扱い利用していくかというプロセスを理解することである。変化していく社会の中で技術も変化しながら、どのような役割を果たしているか、を見つめる目が、技術を正しく行うためには必要である。また、技術者として働く人という観点から見れば、職業人一般の倫理と同じことが当てはまる。

このように考えると、職業・技術者倫理という科目は少なくとも三つの理論的基礎を必要としていると考える。

第一は技術論的基礎、第二は倫理的基礎、第三は社会学的基礎、である。

本稿では次節に倫理的基礎について述べることとし、技術論的基礎と社会学的基礎については今後の

課題としたい。

5. 倫理的基礎

ここでは職業・技術者倫理の倫理的な基礎として、規範倫理学の3つの原理、すなわち徳倫理学(アリストテレス倫理学)、義務論(カント倫理学)、功利主義倫理学の三者と、ヘーゲルの言う共同性倫理について考察する。

徳倫理学の三つの概念である「エウダイモニア」、「プロネーシス」、「アレテー」のうち、エウダイモニアは通常「幸福」と訳されているが、英語では‘human flourishing’すなわち「栄え、花開く人生」という意味である。徳倫理学はエウダイモニアが人生の目指すべき姿であり、倫理的な問題に直面したときに私たちの判断を導く最終的な拠り所となると考えている。

職業倫理においては、職業生活が「栄え、花開く」ことを幸福な目的と考えることができる。義務論の立場からは、職業における「善」とは職務を果たすことであると言えるし、功利主義の立場からは「社会の幸福のため」を職業の目的と考えることができる。これら三つの立場はそれぞれとらえ方や表現の仕方が違うけれども、理想とするところは異なる。

アリストテレスはエウダイモニアを主観的なものではなく客観的な意味での幸福と考え、ある程度の裕福さや健康もその要素と考えていた。もちろん「栄え、花開く」のが自分だけであってはならないことは当然この概念に含まれている。職業的エウダイモニアの概念を具体的に描くことも職業倫理学に必要な要素である。

また、その実現のためにはどのような徳が必要かという問いについても様々な調査研究の結果等を活用して具体的に学ぶことができる。徳(アレテー)という言葉には、「能力」という意味が含まれる。これも職業倫理を考えていくためにふさわしい概念である。さらに、様々な問題に対する判断力として、プロネーシス(倫理的知恵)を追究していくことが必要である。

以上のように、徳倫理学の問いの立て方は職業の理想や職業に必要な徳(能力)、実践的知恵、判断力を考えていく際の導きとして役立つことができる。

義務論と功利主義は「徳」を考えるというよりも、倫理的な行為あるいは判断の指針を与えようとするものである。義務論も功利主義も職業上の責務や社会的貢献を考える際に役立つし、倫理的判断が問題となるときに必ず参照されることになる判断基準の代表

的なものである。これら倫理学の三つの立場は、それぞれが私たちにとって大変身近なものであり、各自が自分のものとしているものでもある。これらの尺度を吟味して、その有効性や問題点を理解することも重要な課題となる。

カントの義務論は「定言命法」として有名なように、無条件の厳命である。たとえば「嘘をついてはいけない」ということは無条件にそうなのであって、誰かの命を救うためだ(と思った)としても間違ったことは間違ったことであり、嘘をつくことが善い行為と見なされることはない。カントのこのようないわゆる「厳命主義」は実践的と言えないという批判を受けているが、私はこのような厳命の必要性を否定することはできない。

功利主義だけでは倫理的問題を考察することはできない。「無条件厳命」を重く受け止めれば受け止めるほど他の義務との衝突などの葛藤に陥ることがある。しかし葛藤に出会うからといってその理論が無意味だということにはならない。倫理的判断力は葛藤の中でこそ鍛えられるのではないだろうか。授業においても倫理的判断が難しいような場合を議論し考え抜くことによって学習が深まると感じている。

功利主義は「社会全体の利益が最大になるように」行為することが善であると考ええる。「公益優先」の原理として重要なものである。ここで言う利益とは幸福であるとされる。しかし、何が「利益」または「幸福」なのかについては答えが決まっているわけではない。その判断は具体的問題に即してその場その場で関わる人々に委ねられている。「公益優先」の原則が濫用され、誰かの大きな不利益をもたらすようなことも生じうる。何が利益または幸福であるかを考える際には、功利主義ではなく別な倫理基準が必要なのである。ここで、個人の人格は最高の目的であり、その尊厳は不可侵であるというカントの厳命が重い意味を持って来る。

以上述べたように、これら倫理学の三つの立場は、どれか一つが様々な問題を考える際に万能の尺度であるというわけではない。しかし、それぞれが重要な意義を持っている。従って、私たちはこれらの持つ意義やはらんでいる問題点をよく理解して具体的な問題の考察に役立て、できるだけ適切な判断をするように努力しなければならないのである。

ここで、第四の原理としてヘーゲルの言う共同性の倫理⁶⁾という考え方を挙げておきたい。ヘーゲルの考え方は「倫理とは共同性のことである」というもの

である。倫理とは「共同性への意志」であると言ってもよい。たとえ自分が「善い」と思っている、倫理は独善であってはならない。それを他者との間で共有できる「善」としなければならない。その時その時、関わり合う他者との間で「共同性」を作り出していくこと、すなわち「共同性への意志」こそが倫理である、という考えである。

ヘーゲルによれば、社会は万人のそのような努力によって作り上げられた共同作品である。職業能力の最重要な要素の一つとして、しばしば挙げられるのは「コミュニケーション能力」である。コミュニケーションとは「分かち合うこと」を意味する。私たちが目指すものは独り倫理的であることではなく、ともに善くあることである。

ただし、これは各自の判断の違いや対立を無視して和を重んじるということの意味しない。各自が自分の判断に責任を持ち、他者の判断が違う場合にもその根拠を理解するように努め、共通の土俵を探り、コミュニケーションを捨てず、その場その場で納得できる共通理解を作り出していく意志と努力のことである。このような意味で、「共同への意志」を職業倫理学においても、特に重要な原則として踏まえておきたい。

職業・技術者倫理においては、技術者の仕事の中でこれらの倫理的基準がどのように生きて働いているかを理解していくことが重要な課題である。

6. まとめ

以上述べたように、職業・技術者倫理は、技術論的基礎、倫理的基礎、社会学的基礎の上に具体的な実践の研究を通して作り上げられる。そこにもう一つ付け加えるべき要素として、職業教育についての理解が挙げられる。職業能力の形成という視点から教育をとらえ直すことは、学生にとって自分自身が職業的に自立して働き続けるために学ぶという原点を確認することになる。また自分自身の職業能力と他の人々の職業能力を尊重し、職業訓練の意義を理解する一助となる。職業倫理と職業能力の形成については拙論⁷⁾を参照していただきたいが、今後は技術の営みそのものに即した職業倫理の研究が必要である。

参考文献

1. C.ウィットベック著、札野順・飯野弘之訳：技

- 術倫理 I、2000、みすず書房、pp.vii.
2. リチャード・セネット著、森田典正訳：不安な経済／漂流する個人、2008、大月書店、pp.197.
 3. 参考文献 [2] ,pp.198.
 4. Richard Sennett: *The Craftsman*, 2009, penguin books,pp.294. [訳文は待鳥]
 5. 比屋根均：技術の営みの教養基礎 技術の知と倫理、2012、理工図書
 6. 待鳥はる代：「ヘーゲル『精神現象学』における個と共同体」、『職業能力開発総合大学校紀要』32号B、2003年、および「ヘーゲル『精神現象学』における道徳論」、『職業能力開発総合大学校紀要』第33号B、2004年、「ヘーゲル法哲学における職業論の可能性」、『職業能力開発総合大学校紀要』31号B、2002年
 7. 待鳥はる代：「職業倫理学の課題と諸要素」、『職業能力開発総合大学校紀要』第40号B,2011年

(原稿受付 2015/3/18、受理 2015/6/8)

*待鳥はる代、
職業能力開発総合大学校、〒187-0035 東京都小平市小川西町 2-32-1 email:mharu@uitech.ac.jp
Haruyo Machitori, Polytechnic University, 2-3-1 ,
Ogawa-Nishi-Machi, Kodaira, Tokyo 187-0035